

## 音話屋ダイアリー 連載100回記念

# 音響演出家・石丸耕一氏 インタビュー

前号（2004年7月号）でちょうど連載100回を迎えた人気コラム「音話屋ダイアリー」。今回はそのコラムの筆者、音響演出家の石丸耕一氏にお話を伺いました。

### コンパスの軸

まずは、音話ダイアリーの連載100回突破おめでとうございます。

皆様のお陰を持ちまして第100幕を突破いたしました。まあイチローを真似れば「単なる通過点でしかなく感慨は日付を越さない」と言わなければならないのですが。私はイチローよりもう少しお調子者なので。結構内心密かに嬉しかったりしてるんだな（笑）

編集部から「100回一度も原稿を落とさずに」と褒められましたが、いやぁ、締め切りを守れたことも少なくて、いつも薄氷を踏む思いでした。

同感です（笑）それにしても毎月よくネタがありますね。

うーん、本人そんなに自分でネタが豊富という自覚はないんです。ネタを探すということもしたことないですね。

あとからあとから、頭の中に生まれてくる。

それがね、まだ種の状態だったり、少し芽が出かかっている状態だったり、いい感じで熟成してきていたり、いろいろなわけですよ。で、取り出してみても、まだ熟してないと、文章が進まない。で、あ、これはまだだないと、しまってしまう。捨ててしまわず、熟成するのを待つわけです。何か月とか、半年先とか。

ちょうど頃良く熟していると、スラスラと文章が進んでいく。あ、これならいいなと、自分でも書いて心地いいんですね。だから書き始めたら、一本だいたい30分くらいで書き上げちゃう。

自分で書いてるっていう感じがあんまりないんですね。自分の中から溢れてくるものを書かされているっていうか。あとからあとから新しいものが溢れてくる。

溢れてくるというのは、なんだか作曲家みたいですね。

あのね、おなじだと思うよ。文章を書くのも絵を描くのも、作曲をするのも、音を創るのも。

結局、自分の内なるものをさらけ出す作業だものね。私の本業である音響だって同じ。私は自分がエンジニア、技術者だと思ったことは一度もないですよ。ある意味放送技術にもっともそぐわない書き手（笑）



石丸 耕一（いしまる こういち）

音響演出家。

1964年東京出身。ラジオドラマやCDブック、ヴァーチャルサウンドシアターの脚本、演出家として活躍。

1986年から1990年まで歌舞伎座、新橋演舞場にてオペレーターとして従事。

以降、東京芸術劇場などで舞台のオペ、プランを手掛ける。モスクワ・ポリショイ劇場、モスクワ・マールイ劇場、ユーゴ・ザバード劇場、レニングラード国立バレエ団とも親交が深い。ユーゴ・ザバード劇場名誉音響演出家。

昭和音楽芸術学院、パン・スクールオブミュージック、音響技術専門学校講師。

日本音響家協会会員。

石丸氏主宰HP：<http://www.lunadfuego.com/>

それでは自分の職業的立場をどうとらえていますか？

私は音を仕事にしているという感覚はなくて、自分は音のアーティストだと思っています。音をイメージし、私の身体の中から音を生み出していく。音を創造する。音の世界の住人なんです。

この違い、わかります？ 音を仕事にしているかどうかじゃなく、音の世界に生き、息を吸って吐くように音を感じる生き方ってこと。

すべての感覚、すべての表現手段で、あとからあとから溢れて止まらなくてどうしようもない自分の中からの表現欲求を、絵にするのでもなく、彫刻にするのでもなく、音にするのが一番自分にピッタリしっくり来るんです。それが料理だったら、今ごろ私、フェーダーの代わりにフライパン握ってますよ。

感覚の最初の扉が「音」ということですか？

そうですね、音を聞くと頭の中に色があふれるというか...

小学生の頃、写生大会で小石川植物園に行きまして、ポーと眺めていたサルビアが風で揺れる音を聞いて、そのときに頭の中に浮んだ炎のような絵を描いたところ、先生にすごく褒められた記憶があります(笑)

まあ、大事なことは、音でも音楽でも絵でも彫刻でも料理でも文章でも何でもいいから、自分の主軸をどこに置くのかしっかり決めて、決めたら心を強く持って揺るがない。

そして選んだ主軸を、一生懸命精進する。自分に謙虚に。感謝の気持ちをもって。

そうした精進が、自分を研ぎ澄ませてくれて、その結果、他ジャンルについて語ったりしても、主軸がブレないから相手が納得する意見を言えるようになるんです。違う表現手法をとっても、主軸の反映された、いいものが出来たりするんです。

#### 音話屋履歴書

それでは、石丸さんの経歴からお聞きします。音の世界へはラジオから入られたそうですが。

一番最初はラジオドラマの脚本、演出から音の世界に入りました。

学生の頃はプラスバンドをやっていたり、演劇部の部員に頼まれて音響を見様見真似でやってみたり、放送部に入ったり、今にして思えば、のちに音響に興味を持つことになる下地はありましたね。

日本大学芸術学部の在学中から、ラジオドラマを制作したり、当時のミニFM、今で言うコミュニティFM

ですが、早稲田と神楽坂をカバーしていたBOSSというミニFM局を運営したり、文化放送で働いたり、ラジオCMの制作、あるいは当時NTTがテレホンサービスというのをやっていて、黎明期のファミコンの攻略法を番組にしたテレホンサービス番組を作ったり。その一方で、仲間と小劇場の芝居の音響をやり続けて。3日4日の徹夜なんか平気でしたしね。もうやりたい放題の無茶苦茶な日々でした。

ただ、せっかく選んだ音の世界なのに、あの頃、何をやっても満足が得られなかったの。ラジオやスタジオのような音だけの世界だと、音が主役でしょ。それはそれである満足が得られるんだけど、お客様の反応がリアルタイムではない。夜中のラジオ番組で、小さな局のスタジオで生放送のオンエアをしながら、この夜中に、この放送を、ホントに誰か聴いてくれる人はいるだろうか？って、そういう言い様のない孤独感、孤立感が時折襲ってくるんですね。

で、舞台やなんかのライブの世界をやると、目の前のお客様との一体感という、これはもうドーパミン出まくりのアドレナリン回りがまくりのめくるめく世界が展開されるわけです。その満足は嬉しいんだけど、今度は、そこでは音が主役じゃない。ラジオやスタジオみたいなわけにはいかない。

そうやっていつも、振り子のように、片方での欲求不満をもう片方で晴らすという、常に飢餓状態の中でフラフラしてましたね(笑)

そんな中、商業演劇の世界へ進まれること決意しますが。

どんな人にも、そういう、人生の大きくて大切な節目が来ますよね。どの道に行くのか、一つに決めなければならぬ時が来る。

私はやはり舞台での、一期一会の観客の持つパワーに魅了されました。

それで舞台音響の世界に進むことに決め、ショウ・ビズ・スタジオという音響会社に入社しました。新橋演舞場や歌舞伎座でのオペレート業務を中心に、単発で明治座、日生劇場、帝劇など出かけていたり、いやでもハッキリ言わせて、足手まといの新人だったと思います。

さすがに商業演劇の世界の頂点で、毎日自分のダメさ加減に打ちのめされているような日々を何年も続けると、多少なりとも身に染み込むものがありまして。現在の私を形成してくれたものです。

その後、1990年に東京芸術劇場がオープンし、これから落としメンバーで参加しまして、それからそこに籍を置きながら、芝居やミュージカル、オペラの音響デザインや、遊園地の「音のお化け屋敷」の制作に参加したり、立体音響作品の制作をしたり。また、実験

会やイベントを企画したり、国際福祉機器展に出展したり、日本音響家協会の活動に参加したり。いろいろです。

この音話屋ダイアリーの連載もそうですね。

この連載からも、いろいろ話が広がっていきました。今3つの専門学校で講師をやっていますが、いずれもキッカケはこの音話屋ダイアリーです。バックナンバーをサイトに掲載していて、それを読んで下さったのがキッカケで講師の話が来たんです。

NHKのニュース11に出演したのも、FM東京の番組に出演したのも、J-WAVEのマクドナルドのCMに出演したのも、みんなこのエッセイがキッカケ。

たった1ページでも、コツコツ100回続けると、いろいろな方へ広がるもんですね。

### 傷だらけのピュア

そして、現在は順調に音の世界で活躍されていますが。

いやぁ、全然順風満帆じゃないですよ。

もう何十年も、ダメダメのへこみまくりの、裏切られたり嘘つかれたり。ポロポロです。

でも信じるということを見失わないでやってます。信じてだまされるのは、可哀想だけれども馬鹿ではないからね。

信じる、っていうのは、一番真実が見えにくい状態ですよ。だって信じちゃうんだから。疑ったり検証したりしない訳だから。

それは本当はものすごく大きな力になり、大きな成果、大きな幸せを生む根本の原動力の筈なんです。

ところがね、相手が信じているのをいいことに、相手からはちゃっかり色んなものを頂戴し、自分は嘘ついて隠し事して裏切っている人っていうのは、確実にその嘘をついている人自身を蝕んでいきますよ。

それなら私はだまされる側にいる。そこでは手に入らないけど自分を失ってはいない。プラスにならずにゼロになるだけ。でも、嘘ついて隠し事して裏切っている側は、必ずマイナスになる。自分自身を失うから。

なんでここでこんな話をするかっていいますとね。表現行動を起こす時。浮かび上がったイメージを造形し始める時。どんな企画、どんなプロジェクトを立ち上げるか創案する時。自分に一点曇りのないブレファレンスを保っていないと、形にならない。歪みが出てしまう。底が割れる。オーディエンスに「ああこんなもんか」とたかをくくられてしまう。

ピュアであることの大切さと難しさ。

それは、同業者の視線なんか比じゃない。そんなもんどうだっていい。相手は素人のお客様。

視点を常に客席に置くという絶対はずせない作業に

おいて自分をピュアな状態にキープするのは欠かせない。お客が素人であるほど、見抜かれてしまう。

だから、どんなに不器用でも、仕事がとろくても、段取りが悪くてもいい。でも、私の周りに嘘つきはいらない。

その「ピュアであること」をもう少し聞かせてください。

昔、冬のヨーロッパのアウトバーンを車で走っていた時の話なんだけど。雲が低く、遠くで太陽がちらつき、道の両脇では牛が草を食べている。そんな、世界が静止したような素晴らしい風景を目の前にして、ふとフランスの画家ミレーの「晩鐘」を思い出したんです。

で、そのときビリビリッと気づいたんです。ミレーが天才だからあんな素晴らしい絵が描けたんじゃない。こんな素晴らしい世界があって、ミレーもその風景に感動したから、あの絵が描けたんだと。素晴らしい芸術というのは、優れたアーティストが生み出すのではなく、素晴らしい世界がアーティストを通して表れてくるものなんだと。

だから、アーティストや芸術家というのはそれらを通すプリズムでしかないということに気づいたんです。

そのためには、常に謙虚に自分のプリズムをピュアであるように磨いていようと。観客に「俺の音の世界を聞け〜！」なんてことは絶対に考えてはいけないということです。

そんな中、舞台オペレーションでの失敗談はありますか。

山ほどありますよ（笑）

例えば、自分がオペレーションしている公演で、こっちが意図していない場面で観客がものすごくうけた日があった。そうすると役者もノってくる。「よ〜し」って、いい気になって次の日の公演でも同じことしてみると、これがまったく盛り上がらない。



まあ、その時点で、曇っちゃっているんでしょうね。プリズムが。そのフェーダーを動かす親指の数ミリの動きに、欲がでちゃってるんです。

### 音・音楽・言葉・沈黙

石丸さんの「音」に対する想いを少し聞かせて下さい。「音」というのは音楽だけじゃなく、言葉、沈黙などすべてを含んでのもの、ということですが。

例えば言葉。私にとって、音というものの根本は、言葉なんです。コラムでも書いたけど、言葉は、文字でもなく、意味でもなく、音として捉えるのが一番正しい。だって言葉はそのために、そういうルートで生まれてきたんだから。

言霊、ことだまってよく言うでしょ？ 言葉は声に出して音にすることで力を持つ。

だから、その言葉で、嘘を口にしたら、どうなると思う？ さっきの話に繋がるけど、言霊が貴方に跳ね返って貴方を滅ぼすよってことなんです。

音楽っていうのは、その延長線上に生まれてきたものですよ。口に出して音にした言葉を、もっと伝えたい。そこから生まれたのが歌、そして音楽。

だから、私は、音楽は大好きですが、他の人に比べると、音楽に対して、ほんの0.1歩くらい引いているというか、他の人に比べて、音楽というものにほんの少し冷淡かもしれない。

音楽は大好きだし、何でも聴きます。ロックだろうとクラシックだろうと伝統音楽だろうと、外国の民族音楽だろうと。テクノとかハウスとかトランスとかを私がよく悪口いうので、周りは私がそういうのを嫌いだと勘違いしてますがとんでもない、大好きです。フランス人の義弟が貸してくれる、今フランスでブームのアラブテクノなんか、面白いですよ。新宿伊勢丹の地下にあるボンジュールレコードはそういうものの宝庫でしてね、フランスからのジャケットは見るだけで楽しい。

ただそのすべてに対して、公平で均等な距離を保とうとしてしまいますね。だから、好きな歌手、好きなアーティストっていうのが、ほとんどいない。曲を好きにはなるんですが、同じ歌手のCDがずらっと並ぶというのは、めったにないです。だから私のCDラックは、歌手や音楽のジャンルがめっちゃめちゃで（笑）サントラと効果音の棚が妙に充実しててね（笑）うん、音楽に対してフラットなんだらうな。

音楽は、この世に無数にある音の中のごく一部、という捉え方をしている、と思う。自分で。

なんせ、私にとっては、沈黙も、大切な音だから。沈黙、っていうのは、音がない状態ではなく、沈黙という音が、そこにある。

とても複雑で豊潤な、とても饒舌な、沈黙、という

音。

ハムレットの最後の台詞「あとは...沈黙」という、これを読んだ瞬間、自分の中からウワッと物凄い量の音が沸き上がってきて、収めるのに大変でしたもん。それだけ、音というものの持つ力を信じている。音楽を含めて。

本当に心から感動する音楽もあるし、何十分も延々聴かされたあげくつまらない音楽もあれば、たった一瞬の音に、はっとさせられたり激しく心を揺さぶられたりする。

私にとって、交響曲も一滴の水滴の音も、同じウェイトなんです。

そういう、自分が信じている音の力で、自分は何ができるだろう。自分は音を通じて、人に、世の中に、ささやかなことでもいいから、少しでも役に立てることがあるだろうか。

私が音の仕事に携わるモチベーションが、これですね。

その「音」の力を信じるキッカケというのは？

実は失語症寸前になったことがありまして。

子供の頃、父の仕事の関係で東京、大阪、はたまた韓国と転々としていたんですよ。そこで方言や言葉の違いから、からかわれたりして言葉に対するコンプレックスでしゃべることができなくなりました。

ちょうどその時、心配した知人が観世栄夫さんの「子午線の祀り」という郡読劇に連れて行ってくださったんです。その劇を見て大変感動しまして。言葉が音の塊として舞台からぶつかってくるパワーや日本語の響きの素晴らしさに圧倒されて、救われた気持ちになりました。こんなに素晴らしい言葉をしゃべらないなんて、なんてもったいないんだと。

その経験は音の持つ力を信じるキッカケとなりましたね。音で人は幸せになれば、死んでしまうこともあるという。

それはコラムの中で何回も書かれていますね

そうですね。音話屋ダイアリーの中で何度も書いてきた、音響のアルファとオメガの話です。

「音で人は幸せになれる。

音で人が傷つき、死んでしまうこともある。

私達音に関わる人間はずからく、

自らの扱う音の影響力の大きさを自覚し、

願わくは一人でも幸せになって貰いたい。

これが音響のアルファでありオメガである。」

これは、随分と沢山の反響を頂きましたし、今でも頂き続けています。

でも、特に変わったことを言ってる訳でもなく、よ

くよく考えれば、あたり前のことなんですけど。

それに対してこれだけの反響、これだけの共感が寄せられるというのは、別に私が偉いわけでもなんでもなく、こういう、根本的なあたり前のことが現在渴望されているという現状があるんだと思います。

ということは、このあたり前のことが、欠如しているということ。

音響を取り巻く現状、世の中での音響というジャンルの現在の立ち位置のまずさは、そこに原因があるんだと思いますね。

### 一瞬の永遠～刹那の世界

観客と役者と裏方が一体となって作り上げる舞台はその一瞬で終わってしまうはかなさがありますが。

まあ、その「一期一会」に魅力があるわけなんですけど、以前、ピアニストの中村紘子さんがこういうことをおっしゃいました。

「花を咲かせるのは大変だ。種を蒔いて水をやって。一生懸命手間と時間をかけなければならない。それをお花畑にするのはもっと大変。長い長い時間と、沢山の人の力が要る。

でも、花を枯らすのは簡単。

花は食えない。

誰かが一言、そう言えばいい。」

もうホントに、その通りですよ。芸術というものの全体に言えることだし、音という、形に残らない表現芸術のアイデンティティーに突き付けられた永遠のハンディキャップ、苦しみ、足枷ですよ。

世の中は、特にこの国は、目に見えない、形に残らない物に対して価値を見出さず、水商売という単語でくくって評価をせず、だからお金が回らない。一番、何とかしたいと思うところなんです。

それは音に限らず、料理もそうだし、フラワーデザインみたいなものもそう。

ある有名なシェフが、小説家に向かって、「作家の



先生はいいですね。御自分の本にサインができて。」と言ったそうで、その作家は、そのシェフの、形に残せない、生まれた瞬間から消滅していくさだめの料理という芸術に対する凄まじい自負とプライドを感じた、と記していましたが、私は逆に、そのシェフに対し、限らないシンパシーを感じます。

私だって思いますもん。会心の音が出た瞬間、「ああ、この空間と時間を永遠にとめて、この空間にサインしたい」って。

形に残らない、生まれた瞬間から消えていくさだめの、刹那の世界。

でもね、それが心に残ることによって、永遠を得るんだよね。

形のあるものは壊れてしまったり、色褪せてしまったり、仮に変わらなかったとしても、それを見る側の方が変わってしまって、前とは違って見えたりして、視覚は意識上の感覚と言ったけど、逆に視覚ほど当てにならないものはないと言えるかもしれないね。星の王子様も言ってるじゃない。「大切なものは、目には見えないよ。心で見ないとね」って。

音の世界を選んだ時点で、世の中のそういう価値観に対峙する宿命になってしまった訳ですが（笑）やはり、そこを変えていきたい。腕ずくで変わるもんじゃないから、みんなの認識が新たになっていってくれるような、そういう活動を、ちっちゃいものでも、こつこつ、続けて積み上げていくしかないんだ、と思う。

これから...

最後に、これから先のことをお聞きます。

うーん。

今までどおり、「音の世界を遊んで生きる」って感じかな？（笑）

最初の方でも話したけど、主軸を持たずにあっちへフラフラこっちへフラフラしてても、何にも生まれえない。でもね、主軸がブレずにピシッとしていて、その状態でいろいろ遊べば、主軸が大いに反映された、いいものが生まれてきたりするんだと思うよ。

そしてその姿勢を保つことが、いろんな所から声をかけていただけが一番の理由なんじゃないのかなあ。音の持つ力を信じる。もっと。

いろんなことができるはずだし、いろんな幸せを生むことができるはず。

やりたいことは山ほどある。よくまあこんなに湧い

ミュージカルの公演にて。卓が3台並んでおり、石丸氏が提唱するスリーマンオペレーション（音楽、台詞、効果音のオペレーションをそれぞれ独立させる手法）の様子がうかがえる。

てくる、って自分で呆れるくらい(笑)

やりたい事をやろうとしている間に、いろんな所から声をかけていただいて、それをまた一生懸命やっているうちに、自分でやろうとしていることがどんどん先送りになっちゃう(笑)

でも、それがいやとは全然思っていないし、とっても嬉しく有り難いと思ってる。そこからまた自分が成長できるし、引き出しが増えるし、また新たに自分でやってみたいことが増えるし。

つい先日も、歌のショーの構成・演出の話が来ちゃいまして。一つパッケージを作って、それを全国ツアー用とホテルのディナーショー用に簡単に仕立て直しが効くようなものを、って。うわぁ、まあ間口が広がってとっちらかっていくなぁ、と困って見せながらもそんな状況を自分で楽しんでたりして(笑)

それは既に音響さんの仕事を超えていますね。

いやそうじゃない。音響だから、音の世界の住人だから、そこに主軸をしっかりと打ち込んでから、だからこういう話も来る。ピュアな状態をキープしようとし続けてるから。誰にでも嘘、隠し事、裏切りのない、誠実なつきあいをしてきたから。それは、ここまでの私の話をずっと読んできてくれば、もう理解してくれるよね。そうでなければ、そうやって音響以外の話が、音響以外の世界から、向こうからやってくる理由がないじゃない。

今一番やりたいことはなんですか。

今一番やりたいのはライブ。卓の前から離れて、ミュージシャンや映像作家と、インプロビゼーションでやるライブ。私は音響機材は使わず、いろんなマテリアルを並べて。そのマテリアルから現れる音、と言いますか、マテリアルを通して自分の中から現出する音をちりばめて、奏でて。

96年にやった時には、芸大の教授に「君のやっていることは立派な無旋律音楽だよ。音のコラージュだのコーポだの言っていないで、無旋律音楽として堂々と発表すべきだ。これは立派な芸術だよ。」と言われましてね。

相手は褒めたつもりなんでしょうがね。いやぁこちらはヘコみました(笑)

なんでかっていうとね。ああ、結局、音の世界の中で、音楽が格上、音楽以外の音は格下っていうふうに見られるのか、って思っちゃったわけ。その時は。

以来、封印しちゃったのよ。

まあ、あの頃32才、私は今年で40才ですんで、自分の中でも、今ならあの頃よりもっと豊かな音が自分から出てくるな、という、無理のない余裕のある自信が出てきましたんでね。やろうよ、と言ってくれるミュ

ージシャンもいますし。

具体的なイベントはもう一つ、企画があるんです。これもやはり、音楽、映像、光、そしてもう一つ、ちょっとスペシャルなアートが加わって、ね。

それが何かは今ちょっとシークレットなんだけど、でも普段の私の音話屋ダイアリーを読んで下さっている方々には、簡単に見当がついちゃうだろうなぁ。そのイベントは、私は完全に、構成、演出、プロデュース。音響はノータッチ。

これもまあ、ライブをやるのが目的なんじゃなくて、そんな近視眼的な短絡的なことじゃなくて、その先にあるものが私の行く先なんですけどね。

それはこれから重点的に行っていくオペラ公演のサポートもそうだし、従来どおりの舞台公演の音響デザインもそうだし。立体音響の完パッケージ制作もそうだし。

それが何かっていうと、自分でも漠然としてるんだけど、多分、私が欲しいのは本来どうあるべきなのか、という、この世の真実。

真実は一つだと思う。でもその真実に辿り着くにはいろいろな道があると思う。私は音という道を選んだけど、それが絵だったり料理だったり、芸術の世界でなくても、建築だったり、金融でも、お商売でも、なんでも同じ。

単に職業として生活のお金を得る手段にしかしていないのか、単に自己表現・自己満足の鬱憤晴らしにしかしていないのか。

そうではなくて、それを自分の生きる道として、誠実と感謝を道連れに、それによって一人でも誰かのためになるように、最後にはこの世の真実に辿り着くように、ゆっくりゆっくりでもいいから、道を踏み外さないように生きていく。

誰かのために。

大上段に振りかぶるつもりはないけれど、誰かのために。なれたらいいなぁ、くらいの。

あのね。北極星はね。

北極星より明るい星は沢山あるよ。北極星より目立つ星はいっぱいあるよ。

でもね。北極星がないと、星はどこを向いて巡ればいいのか、わからなくなっちゃうんだよね。

北極星を探したい。北極星へ続く道を探して、歩いていく。ゆっくり、のんびり。

その歩いていく日々を、「私は今、こんなところを歩いていて、今日はこんなことを考えました」っていう、つれづれなるままの日記が、音話屋ダイアリー。まあ、しょーもない、といえはしょーもないものですが、こんな私の日記でよろしければ、皆様これからもどうぞ、よろしく願いいたします(笑)

本日はありがとうございました。